小羊チャイルドセンター増築建物の設計について

―子供の目線と感性を大切に―

平野十三春

市川益子先生は増築趣意書で次のように述べておられます。

平成23年、小羊職員管理人として永年縁の下の働きをしながら、幼児達の心に大切な愛と言う遺産を心に残して他界しました。

愛称「おじちゃん先生」は各家庭の事情で超早、超遅の園児を家庭的雰囲気の中で保育士と共にみて参りました。そんな場所にはぐくまれた愛のこころは本人が亡くなっても一人一人の心に住みついております。その跡地にこの事が受け継がれるようと更にゆとりのある保育室を増築して情操を育てる多目的ホールとしても卒園児、地域交流、子育て相談にも応えて行ける憩いの場としての役目を果たす建物が必要と計画致しました。

設計はこの趣意書に基づいて行っています。

建物は三つの部屋で構成されています。一の部屋はおじちゃん先生を弔い、神への祈りの部屋としての空間、二の部屋は超早、超遅の園児の保育の場や卒園児、地域交流の場として空間、三の部屋は子育て相談にも応えて行ける憩いの場としての空間です。

この建物にはいくつもの特徴があります。その一つは天井のデザインと屋根の形です。

一の部屋の天井は八方から頂点にせり上がって集まる竹垂木にヨシ張りの拝み天井です。床から天井の頂点まで7.5ｍあります。ヨシ張りの施工は茅屋職人によって施工されました。

竹やヨシは成長が早く丈夫で勢い良く天空に向かって伸びる姿は子どもの生き方の象徴です。

天井の四方に天窓が付いており、夜は照明が灯されます。屋根は30度の急勾配の四方流れとなる方形の寄棟で、頂点の高さは地上から10ｍです。屋根の先頭に十字架があります。

ここに使われたヨシは埼玉、群馬、栃木、茨木の４県またがる渡良瀬遊水地のヨシを使いました。渡良瀬遊水地は、ヨシ焼きで有名ですが豊かな緑を有し、その面積は1,500haと本州最大のヨシ原で多くの動植物の生息空間となっており、２０１２年７月にラムサール条約湿地に登録されております。

この竹を放射状に組んだヨシ張りの天井は、京都東山の高台寺建っている重要文化財である傘亭を参考にしました。傘亭は利休の意匠による秀吉公好みの小さな茶室で、北政所が秀吉公菩提を弔うために、秀吉が伏見城で舟遊びをしたときに使われた茶室を移築したものと云われています。

２の部屋の天井は、二重天井で下がり天井は漆喰仕上げで雲形に縁どられています。上部は杉板の方形天井です。二重天井の間に間接照明を設置し、天井を明るく照らしています。屋根は切妻屋根です。

３の部屋は和室でその天井は、垂木と小舞に竹を用い野地板にヨシを張った船底天井です。照明は少し暗くして落ち着いた雰囲気にしています。屋根は片流れ屋根です。

この三つの部屋は天井も屋根も異なったつくりにしており、それぞれの部屋の用途に応じて異なる空間を特徴づけています。それは、そこで遊ぶ子供たちが多様な空間の面白さを体感して、何かを感じとってもらうための建築的表現の一つです。

二番目の特徴は塗り壁にあります。

各部屋の壁は土壁や漆喰の塗り壁で仕上げています。三の部屋の和室は京錆土仕上、一の部屋は土佐漆喰に京錆土（赤土）、二の部屋は土佐漆喰に稲荷山土（黄土）を混ぜた天然の色で仕上げています。これらの塗り壁は、自然素材であり、調湿能力やＶＯＣ（有機化学物質）の吸着機能があり室内の環境を人にやさしく健康的に守ってくれます。

土壁の土も漆喰の原料である石灰も全て日本国内で産出できる天然素材であり、日本古来の伝統的な壁材です。その塗り壁の色は美しくやさしいものです。それは自然素材の持つ天然の柔らかさであり、時間が経つ程微妙に変化し、何時までも飽きの来ない色合いを保ちます。それらが安らかで住み心地の良い空間をつくってくれる要素だと思います。

ビニールクロスなどの新建材は施工した時が最も綺麗ですが、時間の経過と共にだんだん劣化して醜くなっ

ていきます。これが塗り壁との大きな違いです。つまり、美しいものと綺麗なものとの違いです。美しいものとは、目・耳・心にうっとりさせる感じで訴えてくるものであり、綺麗なものとは見た目がきらびやかではでで美しい様子をいいますがすぐに飽きが来ます。塗り壁の美しさは永遠に続きます。子どもにとって塗り壁の美しさや優しさは心に感じると思います。塗り壁の下地は耐久性に配慮しプラスターボードとラスボードの二重張りで施工しています。

三つ目の特徴は内部の建具のデザインにあります。

建具は、閉（た）てる具の意で、可動の戸と建具枠で構成され建築の開口部を開閉するものの総称です。現在は戸と建具枠が一組となって工業生産された規格品が一般的ですが、この木製建具は全てそれぞれ異なる意匠の設計で、建具職の手作りによって制作しています。

二の部屋と廊下との仕切りは、三角と四角の幾何学模様の細かい障子の組子で、ワーロン紙を用いてカラフルにデザインしています。障子紙を通して柔らかい光を入れ、間接照明と共に明かりの変化を楽しむことが出来ます。三本引きの軽い障子なので取り外しは簡単で、障子を閉めている時は15帖ほどの広さですが障子を外すと25帖の広さになります。

鴨居の上部の丸い欄間はヨシを透かしたデザインで、部屋と廊下が一体的な空間として設計しています。

二の部屋と三の部屋の仕切りも同様のデザインです。尚、三の部屋と廊下との仕切りは引違いの板戸で、縦横に細かい桟を両面に入れて杉板を挟み込んだ木製建具です。和室の部屋の落着きを意図したデザインです。

一の部屋の建具も意匠を凝らしています。上げ下げサッシを覆った六か所の上げ下げ障子は幾何学模様の組子で障子紙から柔らかい光を入れています。障子の上部の組子は十字架を現わしています。

便所の開き戸は両面舞良子の杉板戸、厨房の引き戸は木連れ格子の杉板戸の制作です。

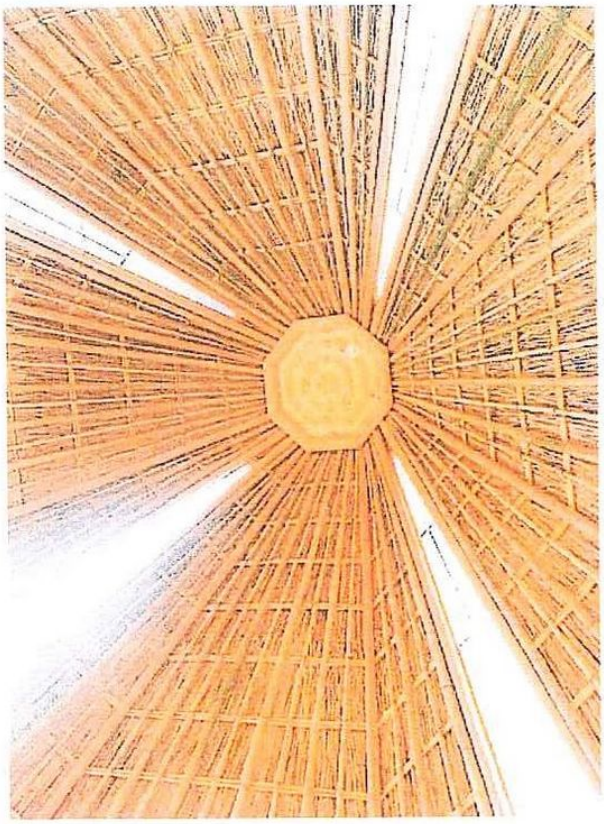
三つの部屋の出入り口はドアーを用いず全て引違いの障子又は板戸にしてあります。それは各部屋を閉ざすのでなく、軽い仕切りを用いることによって各部屋が開

放的になり誰もが自由に出入りが出来、子供たちの環境としても良いだろうと考えたからです。その他の特徴としては、板の間、廊下、トイレの床の仕上げ材に竹の集成材を用いたことです。傷がつきにくく、汚れにくく、水にも強いので子供の活発な活動に最適です。また、和室の畳は、藁床の本畳を用いています。さらに、天井板、壁板、腰板は全て杉の無垢板で張り物

このように室内環境を構成する床、壁、天井は、木、土、草の自然素材で仕上げています。自然素材は呼吸していますので、湿気の多いときは湿気を吸い取り、乾燥している時は水分を吐き出して室内の環境を人にやさしく健康的に保ってくれます。

　このように子供が育む空間の設計で意識したことは、第一に体にやさしく健康的な空間であること、二つ目は美しく楽しい空間であること、三つ目は長持ちして何時までも飽きの来ない空間であることです。そして子供の目線と感性を最も大切に考えたことです。

　七、八歳頃までの幼少年期に育った教育や家の中や遊び場の環境が自己形成空間として、深層意識の中に固着され、その人のその後の生涯を決定づけると言われています。

また、その心象風景は後年になればなるほど不思議な懐かしさを持って思い出されます。

　卒園児が小羊チャイルドセンターの教育とこの建物の環境を懐かしく思い、年長になっても時々集まってくる憩いの場になることを願っています。